

特別史跡 讀岐国分寺跡

平成 3 年度発掘調査概報



国分寺町教育委員会

例　　言

- 1 本書は、香川県綾歌郡国分寺町国分に所在する特別史跡讃岐国分寺跡の平成3年度保存整備事業にともなう発掘調査の概要である。
- 2 本事業は、国庫補助にともなう発掘調査として、特別史跡讃岐国分寺跡調査整備委員会・香川県教育委員会の指導を受け、香川県綾歌郡国分寺町教育委員会が実施した。
- 3 発掘調査および本書の作成・編集は、文化庁・調査整備委員会・香川県教育委員会および奈良国立文化財研究所の指導を受け、国分寺町教育委員会主事松尾忠幸が担当した。
- 4 本書の作成に際し、以下の方々のお世話になった。

奈　良　大　学　　岡　田　英　男
奈良国立文化財団研究所　　町　田　　章・上　原　真　人
文　化　　府　　加　藤　允　彦
香　川　県　教　育　委　員　会　　藤　好　史　郎・大　山　真　充

- 5 出土した遺物については、国分寺町教育委員会が保管している。

序

国分寺町は香川県のほぼ中央に位置し、温暖な気候と豊かな自然に恵まれ、古くから多くの人々が生活を営んできたところであります。このことは本町に残された多くの遺跡が、教えてくれます。

一方、本町は高松市と坂出市の間に位置することから生活の拠点として重要な地域であり、交通網の整備、住宅建設など都市化への基盤が日々進んでいます。このような開発は、現代に生きる住民にとってよりよい生活環境を得るために不可欠であります。その反面、祖先の残してきた重要な文化遺産の破壊につながることもあり、文化財保護と開発との調整を図りつつこれらを後世の人々に伝えゆく努力が必要と思われます。

このような状況の中、国分寺町は讃岐国分寺跡の保存整備事業を進めていく上で、平成2年度には文化庁が始めた「史跡等活用特別事業」の採択を受けることができました。平成2年度は西端築地（約30m）、平成3年度は東端築地（約30m）と10分の1の大きさの七重塔を復元しました。

今年度の発掘調査は、「史跡等活用特別事業」の中で寺域北東地区に伽藍配置模型を設置するため事前の発掘調査を実施したものです。寺域北東地区では、特に顕著な遺構はありませんでしたが、塔跡南東地区で回廊南東隅、指定寺域南地区で南限大溝を確認しました。これにより、讃岐国分寺の伽藍配置がほぼ解明されました。

これは特別史跡讃岐国分寺跡調査整備委員会をはじめ、文化庁、奈良国立文化財研究所、香川県教育委員会のご指導、ご援助の賜と厚くお礼を申し上げます。

来年度は史跡地東側にガイダンス施設を建設する予定であり、歴史と文化の町としてふさわしい史跡の広場として、地域住民の生活に融合する場になるよう整備に傾注してまいりたいと存じます。今後とも関係各位のより一層のご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。

この小冊子が埋蔵文化財保護、とりわけ讃岐国分寺跡についての关心と理解に少しでも役立つことができれば幸甚であります。

平成4年3月31日

特別史跡讃岐国分寺跡

調査整備委員会 会長

国分寺町長 津村文男

章 次

第1章 調査に至る経過	1
第2章 調査記録・発掘資料	2
第3章 遺 箇	5
(1) 寺域北東地区	5
(2) 塔跡南東地区	7
(3) 指定寺域南端地区	7
(4) 小 紹	8
第4章 遺 物	10
(1) 瓦	10
第5章 ま と め	14

図 版 目 次

PL. 1 (1) 寺域北東地区北半部（西から）	(8) 塔跡南東地区（東から）
(2) 寺域北東地区北半部（東から）	PL. 5 (9) S D61（西から）
PL. 2 (3) 寺域北東地区南半部（北西から）	(10) 指定寺域南端地区（東から）
(4) 寺域北東地区南半部（北東から）	(11) 指定寺域南端地区（西から）
PL. 3 (5) S A36（東から）	PL. 6 軒丸瓦・鬼瓦
(6) 塔跡南東地区（南から）	PL. 7 軒丸瓦・軒平瓦・隅切瓦
PL. 4 (7) 塔跡南東地区（北から）	PL. 8 軒平瓦・熨斗瓦

挿 図 目 次

第1図 平成3年度発掘調査位置図	1
2 寺域北東地区遺構図	4
3 寺域北東地区北壁・東壁土層図	4
4 塔跡南東地区遺構図	6
5 主要伽藍配置図	6
6 指定寺域南端地区遺構図	7
7 讀経団分寺伽藍配置図	8
8 出土瓦実測図	11
9 出土瓦実測図	12

表 目 次

第1表 讀経団分寺主要堂塔の規模	9
2 年度・地点別軒瓦出土点数一覧	13

第1章 調査に至る経過

義珍國分寺の保存整備事業は昭和56年から実施することになり、その事務を国分寺町歴史委員会が担当した。また、発掘調査は昭和58年度から昭和61年度を予定に実施された。昭和56年度の第1次発掘調査では寺域の東限と北限を確認し、昭和59年度には鐘楼跡、昭和60年度には僧房跡を検出した。僧房跡は遺構の残存状況が良好であり、全国でも最大級であることから注目を集めた。昭和61年度の発掘調査では、僧房と西側柱筋をそろえた南北棟の獨立柱建物、北面回廊と西面回廊、寺域北限と西限を確認した。

当初は昭和63年度完成を目指として、公有化した土地を憩いの広場とする構想であった。したがって、発掘遺構を保護盛り土の上に新たな素材で平面的に表現したり、建物の基壇を立体的に表現する必要最低限の整備方法を考えていた。しかし、特別史跡瀬戸内国分寺跡調査整備委員会では、史跡を見学する人々にとって理解しづらい面もあるとの意見も出され、遺構の残存状況がきわめてよいことを積極的に活用するために、当初計画とは異なった本格的な整備事業に着手することになった。

昭和60・61年度には指定寺域の周囲の水路を改修し、昭和62年度には僧房跡東半分に覆屋（延床900m²）を建設。僧房の西半分や鐘楼跡・独立柱建物跡は柱位置に礎石及び小灌木を植え、盛土による基壇復原表示を実施した。昭和63年度は、回廊跡を透水板を使って遺構を復原表示し、平成元年度には覆屋内に実物の礎石を使って僧房の一部を復原した。建物の内部構造やその使い方が理解しやすいように柱・壁を途中で断ち切り、部屋内には僧侶の人形2体と机・椅子・御床（ベッド）を置いた。

毎年に整備が順調に進められてきたが、平成元年度の調査整備委員会の中で、文化庁が新たなモデル事業として始めた「史跡等活用特別事業」のなかで整備を実施するようにとの意見が提案され、事業内容として築地塀の復原、伽藍配置模型の設置、ガイダンス施設の建設等の整備計画が審議された。国分寺町では平成2年度から「史跡等活用特別事業」の採択を受け、一般整備から切り替えて引き続いて整備することになった。平成2年度には、西端築地塀約30mを実物大で復原し、平成3年度には整備の基礎資料を得るために、以下の地区において発掘調査を行なった。

その発掘調査は、寺域北東地区、塔跡南東地区、指定寺域南端地区において実施した。寺域北東地区は史跡地内であり、重要な遺構を避けて伽藍配置模型を設置する必要があるため、遺構の有無を確認することが急務であった。史跡地南側付近は民家が密集しており土地の公有化も進んでいなかったが、昭和63年度から平成2年度にかけて塔跡南東付近で土地買上げが行われ、調査が可能となった。塔跡南東地区・指定寺域南端地区的発掘計画は伽藍模型製作の基礎資料を得るために、回廊の南東隅及び寺域南限の確認を目的とした。

第2章 調査組織・調査日誌抄

1 調査組織

調査は、調査整備委員会・文化庁・奈良国立文化財研究所・香川県教育委員会の指導を受け国分寺町教育委員会が実施した。調査参加者は下記のとおりである。

調査・整備委員	津村 文男	国分寺町町長
	吉原 雅韶	国分寺町議会代表
	坪井 清足	前奈良国立文化財研究所長
	岡田 英男	奈良大学教授
	町田 章	奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長
	国島 浩正	四国学院大学人文学科教授（古代史）
	吉田 重幸	香川大学農学部教授（造園）
	丹羽 佑一	香川大学教育学部教授（考古学）
	中村 直	町内学識経験者
事務局	森 唯一	国分寺町教育委員会教育長
	佐々木英典	国分寺町教育委員会教育次長
	松尾 忠幸	国分寺町教育委員会主事
調査指導	町田 章	奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長
	上原 真人	奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター集落遺跡研究室員
調査作業員	荒井綾子、亀井真由美、橘川綾子、栗礼子、千田ツイ子、谷本悦子、山川豊子、山本政子	

2 調査日誌抄

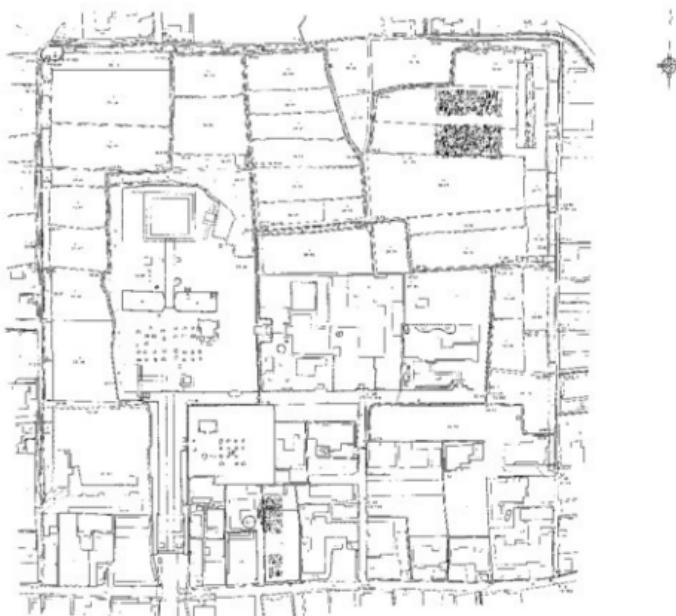
6月 11日：調査の諸手続き準備のうえ、寺域北東地区の北半部の調査に着手。表土は機械を使って排除する。14日：表土から約70cm下で地山を確認。調査区東端で破損した磚が東西に4個並んでいるのを確認する。24日：磚の周囲には焼土や炉跡を検出。

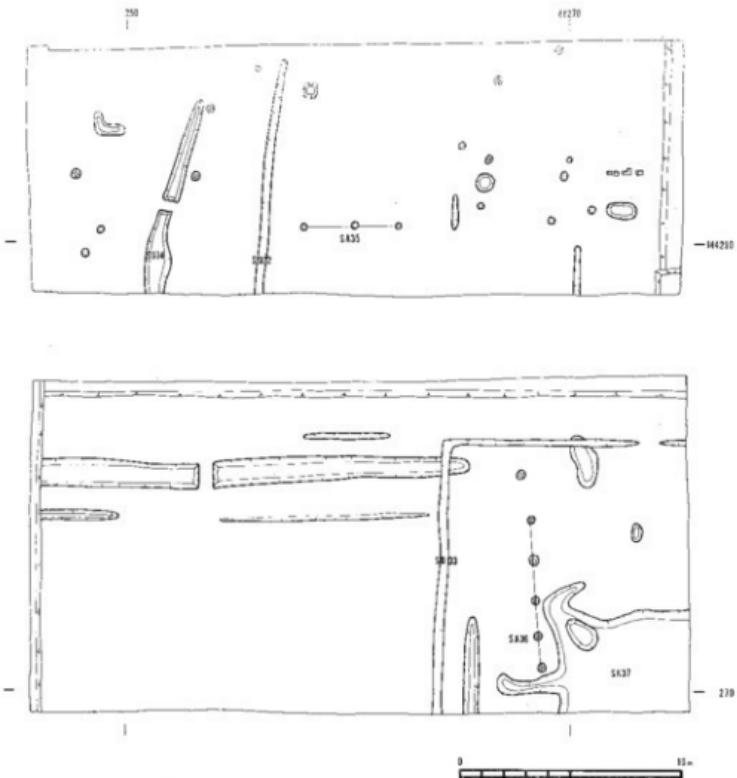
7月 1日：地山面はレキ質となっており、作業がはかどりにくい。調査区中央西よりで溝2条を検出。また、東西方向の掘立柱跡を確認する。18日：寺域北東地区の北半分を完掘するが、特に顯著な遺構は存在しない。22日：調査区を南半部に移動して進める。23日：南西隅で竪穴住居状の土坑を確認する。25日：土坑の西側で南北方向の掘立柱跡を検出する。31日：南半部を清掃して写真撮影を行う。

8月 2日：くの字形の排水溝を確認。10日～18日まで作業は休み。19日：発掘作業再開。調査区を西に移動するが、2条の東西溝以外全く遺構は存在しない。30日：寺域北東

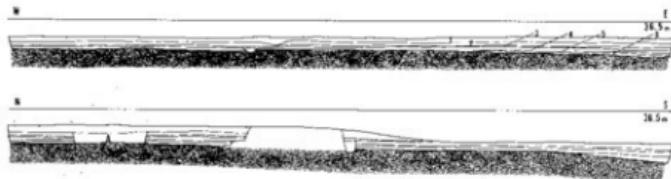
地区を完掘。

- 9月 2日：全体を清掃してして写真撮影を行う。3日：ばかり方杭の設定に取りかかる。6～9日：発蓋を実施。11日：屋内で整理作業を行う。12～17日は作業は休み。18日：塔跡南東地区において調査に着手。19日：試掘トレチで幅約6mの回廊基壇を確認する。23日：機械を使って表土を排除する。
- 10月 7日：回廊の西側雨落溝から多量の軒瓦を出土。また、雨落溝が南で西に曲がっているのを確認する。9日：基壇が南に向けて緩やかに削平を受けているのが判明。13日：指定寺域南端地区で調査に着手。14日：調査区北側で瓦の堆積層を確認。18日：南限大溝を検出。21日：全体を清掃して写真撮影。28日：調査指導のため、奈良国立文化財研究所上原真人氏来訪。29日：ばかり方杭設定。測量開始。31日：調査終了。
- 12月 19日：調査整備委員会を開催。
- 1月以降 各種調査資料の整理と出土遺物の洗浄・注記・実測・拓本などの作業を行う。





第2図 寺城北東地区遺構図 (1:250)



第3図 寺城北東地区北壁・東壁土層図 (1:250)

- | | | | |
|----------------|----------|------|----------------|
| 1.花崗土 | 2.耕作土 | 3.床土 | 4.灰褐色粘質土(旧耕作土) |
| 5.黄褐色粘質土 | 6.灰褐色粘質土 | | 7.灰茶褐色粘質土(地山) |
| A 照和58年度発掘調査埋土 | | | |

第3章 遺構

寺域北東地区 (P.L. 1・2・3, 第2~3段)

寺域北東部に東西30m, 南北30mの調査区を設定した。基本層序は地形に段差があるため、北半分と南半分で異なる。北半分は上から①花崗土, ②耕作土, ③床土, ④灰褐色粘質土(旧耕作土), ⑤黄褐色粘質土, ⑥灰褐色粘質土, ⑦灰茶褐色粘質土(地山)となる。南半分は上から耕作土, 床土, 灰茶褐色粘質土(地山)となっている。地表から約30~70cm下で地表面を確認したが、調査区西半部では地山である灰茶褐色粘質土の上に自然堆積と見られるレキ質土がうすく堆積しているのが確認でき、その固くしまったレキ質土の上から遺構が掘り込まれていた。調査区全体では平安時代末から近世までの遺構を検出した。

S D 32 調査区中央北側で検出した南北溝。幅20cm, 深さ5cmで断面はU字形を呈する。近世の遺物を出土し、瓦礫が多量に充填されており、農業用暗渠排水溝であることがわかる。

S D 33 調査区東南側で検出したくの字に曲がる溝。幅20cm, 深さ5cmで断面はV字形を呈する。S D 32同様近世の遺物を出土しており、農業用排水溝であると思われる。

S D 34 S D 32の西側で検出した斜行溝。幅30cm, 深さ10cmでU字型に掘られている。埋土は茶褐色粘質土でしまっており、遺物は全く出土せず、その性格は分からなかった。

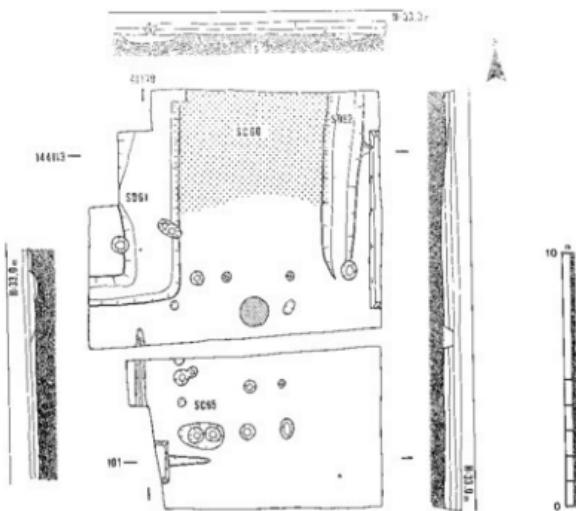
S A 35 調査区中央北側で東西方向の柱穴3基検出した。埋土中に木炭小片を含み、掘形は小さく、遺物は出土していないが、炉跡等に関連した閉塞施設が考えられる。

S A 36 S D 33の東側で南北方向の柱穴5基検出した。柱間寸法は北2間が8尺、南2間は5尺当間と不揃いであるが、国分寺の方位とはほぼ同じであり、北で西にやや振れている。

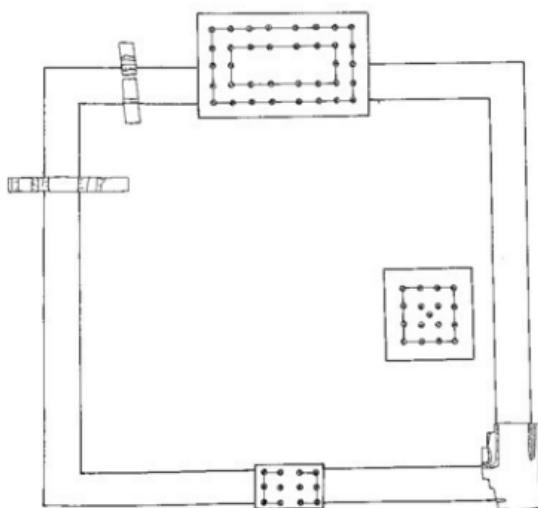
S K 37 調査区南東隅で検出した土坑。規模は東辺、南辺が調査区外のため不明であるが長方形を呈しており、深さは現状で約30cm前後と浅く、壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は灰褐色粘質土であり、中世の土鍋脚片を出土しているが、性格・用途については不明。その他の遺構 調査区東隅では破損した磚が東西に4個並んでいるのを確認した。周辺には焼土や炉跡等が検出されたため、鍛冶工房的な施設が考えられたが、建物に伴う柱穴は存在しなかった。この炉跡からは11世紀後半の土師器杯が出土した。また、調査区南側では東西溝2条を確認したが、どちらも水田に係る畦畔用の溝であると思われる。

昭和58年度に本調査区西側で発掘調査を実施し、東端築地跡を検出した。その遺構面と本調査区はほぼ同レベルであり、水田造成時に大きな削平を受けていないことが分かる。また、調査区北西部は地形がテラス状になっており、西から東に傾斜しており、表面の雨水を東端築地内側の排水溝に流す工夫が見られるが、全体には地形が北から南に傾斜している。

以上、寺域北東地区では大衆院などの雜舍跡の存在が考えられたが、古代の排水溝もなく、その痕跡はなかった。



第4図 塔跡南東地区遺構図（1:200）



第5図 主要伽藍配置図（1：1000）

2 塔跡南東地区 (P.L. 3・4・5, 第4・5図)

塔跡南東地区では東西30cm、南北17mの調査区を設定した。本調査区西端では昭和42年に奈川県教育委員会が寒風斎塗に伴い発掘調査を行なっている。その成果によれば平安時代中期の軒丸瓦が多数出土したが、古代の遺構は存在しなかった。そのため、本調査区も道牌が削平されている可能性が強いと予想された。しかし、本調査区では後世の攪乱は少なく、予想以上の成果をあげることができた。基本層序は上から①耕作土、②灰茶褐色粘質土、③茶褐色粘質土、④黄褐色粘質土（回廊基壇土）、⑤灰茶褐色粘質土（地山）となる。調査の結果、東面回廊と南面回廊の基壇を検出した。

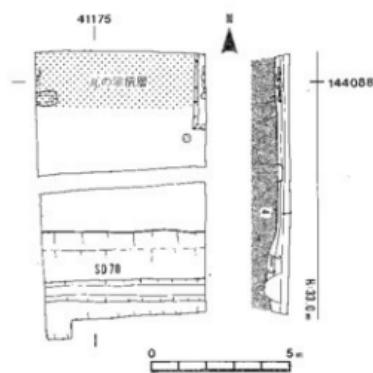
東面回廊 S C60 西面回廊を伽藍中軸線に対して東に折り返した位置で検出した。基壇は北面・西面回廊と同様に黄褐色粘質土を盛っており、東西幅6.4mをはかる。西雨落溝 S D61は幅1.8m、深さ20cm。東雨落溝 S D62は幅1.3m、深さ20cm。基壇上は削平され礎石抜き取り穴も残っておらず、柱間寸法は不明である。基壇化粧の痕跡はない。S D61は南で西に直角に曲がり、南面回廊の北雨落溝となる。S D61からは奈良時代から平安時代中期の軒瓦が多く出土している。S D62からも平・丸瓦が多数出土したが、軒瓦は含まれていなかった。南面回廊 S C65 遺構の残存状況は悪く基壇土は残っていないが、北と南の雨落溝から基壇幅約6.3mとなる。礎石抜き取り穴も残っておらず、基壇上には近世の土坑が多く見られた。S C65の西延長線上に現仁王門があり、現仁王門が旧中門位置を踏襲していることがわかる。

3 指定寺域南端地区 (P.L. 5, 第6図)

指定寺域南端地区では、調査面積は狭いが寺域を画すと思われる南限大溝を検出した。基本層序は上から①耕作土、②灰褐色粘質土、③茶褐色粘質土、④灰茶褐色粘質土（地山）となる。

南限大溝 S D70 寺域南端を限る東西溝。溝からは多量の瓦と共に軒瓦や土器を出土する。軒瓦は奈良時代から平安時代中期までのものがあり、土器は11世紀代の所産である。したがって、造営年代および廃絶時期がわかる。溝外肩が近世水路と重複し削平されていたが、復原すると幅3.3m、深さ60cmとなる。

S D70の北5mの位置で東西方向に瓦が堆積しているのを確認した。奈良時代の瓦を主体としており築地基底部は確認できなかったが、南端築地はS D70と瓦の堆積層の間に存在した蓋然性が高く、削平されたものと思われる。

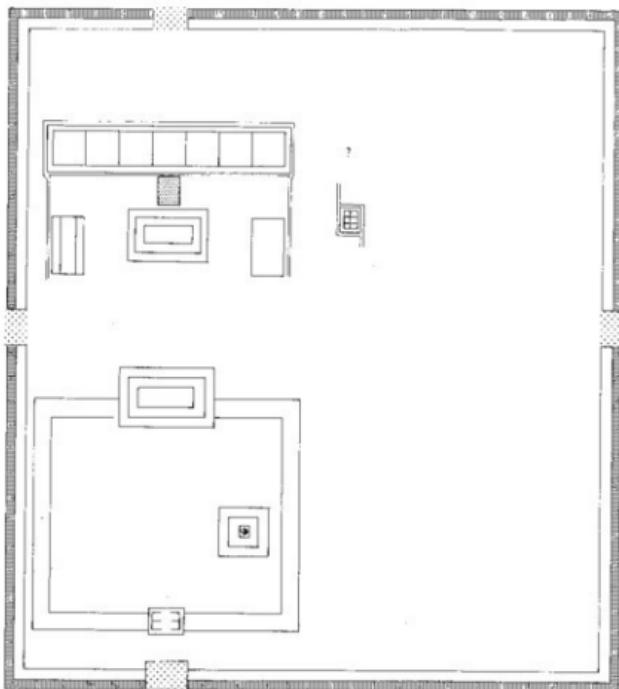


第6図 指定寺域南端地区遺構図(1:200)

4 小 節

講教園分寺の伽藍配置。昭和58年度から昭和61年度にかけての調査では、東・北・西側柱筋、色々筋、御簾筋、僧房と叫喚柱筋をそろえて造立せ造物跡、北西・西面回廊跡を検出した。また、今年度の調査で東西・南面回廊跡、南假大師を確認し、境内に残る礎石と併せて考むるならば、讃岐国分寺の主要堂塔の伽藍配置がほぼ解明された。

発掘調査の結果、講堂跡周辺部の状況が明かになった。僧房と掘立柱建物の西側柱筋や掘立柱建物と講堂の北側柱筋が一致するなど講堂を中心にして計画的に建物が建てられていることが分かる。僧房の北では小子房に相当した建物は存在せず、僧房の北雨落溝に接続する排水溝も見られなかったが、僧房の雨落溝は周囲をめぐって南西隅・南東隅でさらに南にのびて、掘立柱建物の雨落溝となっている。鐘楼の雨落溝も周囲をめぐって南東隅で南にのびているが、北西隅からも北に排水溝がのびており、その延長線上に建物が存在していた可能性は十分考えられる。



第7図 讃岐国分寺伽藍配置図（1：2000）

講堂の規模 今年度の京阪国分寺の検出によって、現仁王門が往時の中門の礎石を従って再建された雖然性が島くなり、金堂跡や華蓋と共に講堂國分寺では中心堂宇の礎石の後序寸法表が長いことが分かる。現本堂も近世の又半瓦に「今本宣者は平山の礎室也」と墨がされており、礎石の石質・形状が金堂跡や塔跡のそれと同じであることから、舞堂跡の礎石がそのまま幾分規模を改めて使用されたと考えられていた。昭和16年から18年に解体修理が行われた際、若干の調査が行われ礎石の下から瓦が出土したため、礎石が動かされ柱間寸法が変更された可能性が指摘されている。しかし、現本堂の中軸線は伽藍中軸線と一致し、北側柱筋は昭和61年度に検出した掘立柱建物の北側柱筋と一致している。また、礎石下から出土した瓦も礎石の沈下に際して、かさ上げを行った結果混入した可能性がある。僧房でも礎石のかさ上げを行ったため、礎石下から平安時代の土器が出土している。以上のことから、南側柱筋以外そのほとんどが原位置を保っている可能性が強いように思われる所以、講堂の規模について検討を行う。

現本堂は実測が行われており、桁行 $2.89+3.66+3.87+3.66+2.89$ m、梁行 $2.89+2.89+3.47+3.47$ m+ 2.89 mとなっている。しかし、現本堂は鎌倉時代の建物であり、尺の基準も多少異なっており、この柱間寸法が奈良時代の礎石の心々距離を示していないであろう。したがって、天平尺を使って整数値で割り付けるならば、1尺を 0.296 mとして桁行 $10+12+13+12+10$ 尺、梁行 $10+11.5+11.5+10$ 尺となる。実際現地で礎石の柱間を計ってみたが、この数値でも礎石の心々距離としても問題のないことが分かった。現本堂基壇の東西には礎石が残っていないが、講堂の場合、7間×4間が通例であることから、讚岐国分寺の講堂は天平尺で桁行 $10+10+12+13+12+10+10$ 尺、梁行 $10+11.5+11.5+10$ 尺であったと考えたい。

建物の種類	柱間寸法		1尺=0.296cm 基壇の規模
	桁行	梁行	
金堂	$12+13+14+16+14+13+12$ 94尺	12×4 間 48尺	118×72 尺（推定） 過去に雨水によって地面が削られ、磚積基壇が確認されている。
塔	$11+12+11=34$ 尺	34尺	60尺四方（推定）
講堂	$10+10+12+13+12+10+10$ 77尺	$10+11.5+11.5+10$ 43尺	不明
僧房	13.5×21 間= 283.5 尺	13.5×3 間= 40.5 尺	297×54 尺
鐘樓	7×3 間= 21 尺	7×2 間= 14 尺	30.5×24 尺
掘立柱建物	10×7 間= 70 尺	10×4 間= 40 尺	但し、1尺=0.294cm
中門	$10+13+10=33$ 尺	10×2 間= 20 尺	不明
南大門	不明	不明	不明
回廊	不明	基壇から $12.5\sim 13$ 尺程度	幅22尺
築地	寺域は外溝の中心で東西230m、南北240m	本体基底幅6尺 基底部幅15尺	

第1表 誉岐国分寺主要堂塔の規模

第4章 遺物

1 瓦 (F L. 6・7-1, 第3・9図)

平成3年度の発掘調査では、軒丸瓦19個体、5型式5種、軒平瓦21個体、5型式6種出土した。また、若干の鬼瓦・隅切瓦・熨斗瓦がある。

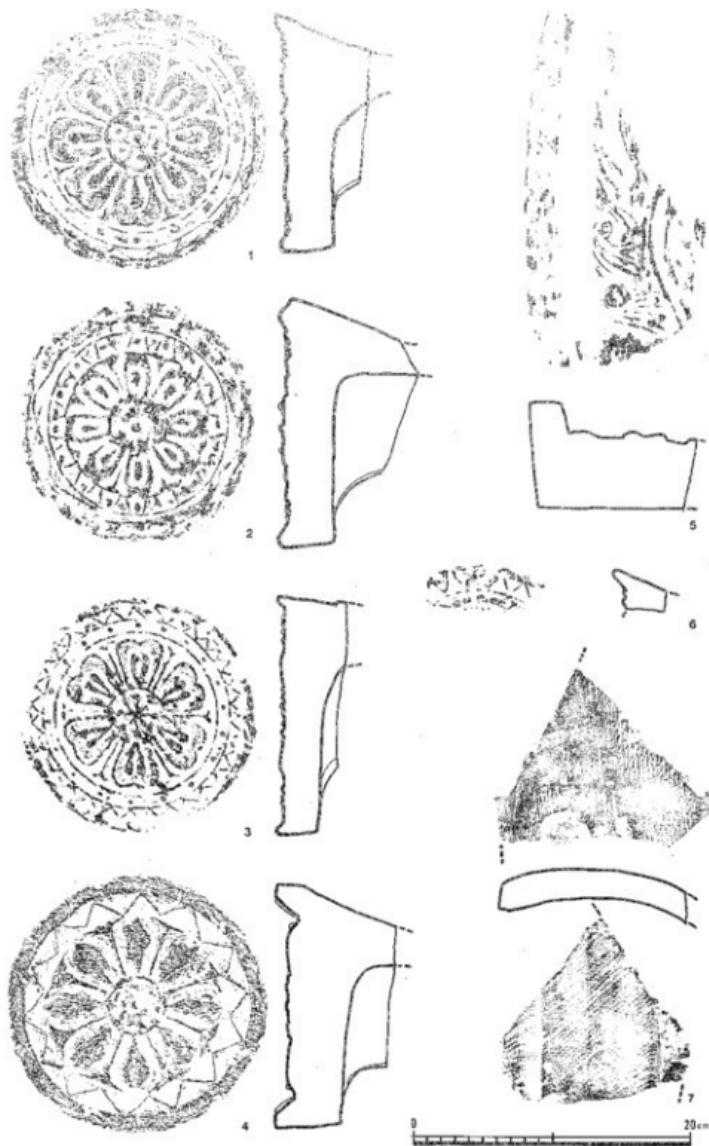
ここでは、回廊跡と南限大溝から出土した軒瓦・道具瓦の一部を採り上げる。

S D61出土瓦 S D61からは、軒丸瓦16個体、4型式4種、軒平瓦12個体、2型式3種と鬼瓦・隅切瓦が出土した。平安時代中期の軒丸瓦が多数出土しているにもかかわらずそれと組合う軒平瓦が出土していない。

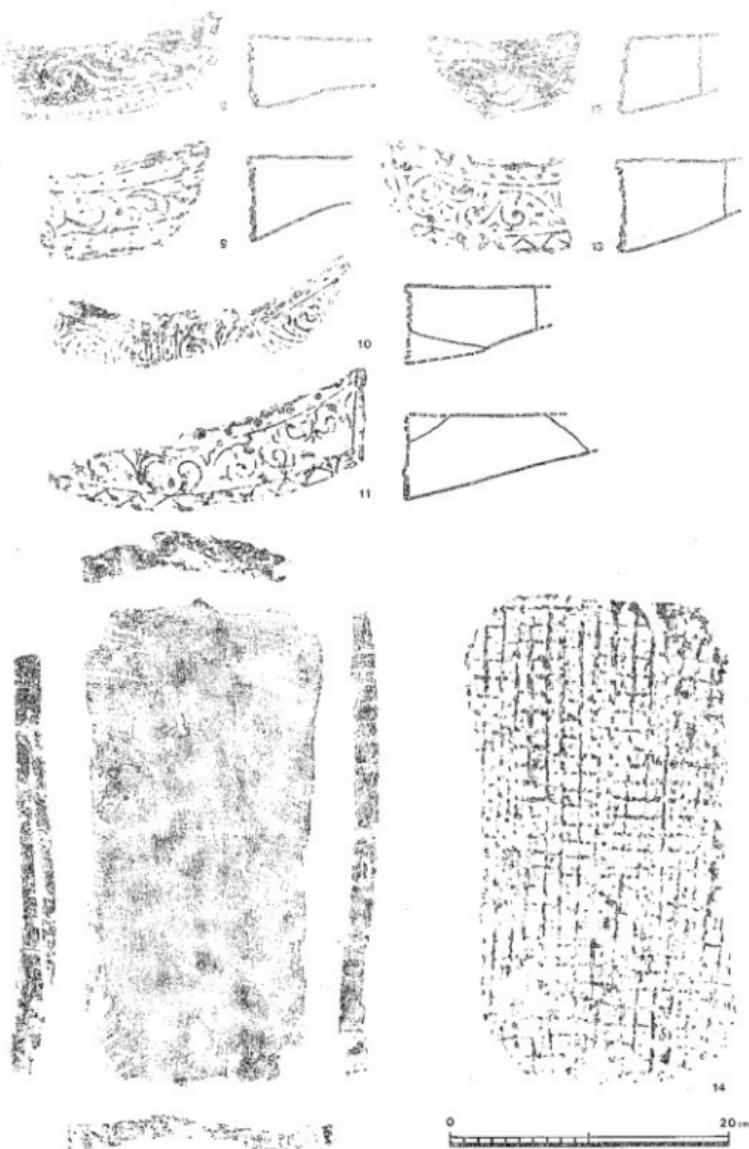
1はSKM04である。瓦当は範割れを起こし、珠文がつぶれるなど瓦筋がかなり摩滅しており、ハナレ砂を施している。瓦当裏面は内外面に多量の補強粘土を施している。焼成はやや不良で、色調は赤灰色である。6はSKM05であり、外縁部分だけ残り、自然釉が付着している。2はSKM09である。瓦筋が瓦当外周に及んでいるのが確認できる。焼成はやや軟質であり、色調は暗褐色を呈する。3はSKM15である。範抜けはよく、文様は平板的である。丸瓦は瓦当裏面の上端部に接続し、内面に多量の補強粘土を施している。焼成はやや軟質であり、色調は淡灰色である。13はSKH01Bであり、左半部が残る。焼成は堅緻であり、色調は灰色である。11はSKH01Cであり、中心部から右半部が残る。焼成は堅緻であり、色調は灰色を呈する。雨落溝では最も多く出土し、粘土板合せ目面で剝離しているものもある。瓦当面から7cmの凸面に幅3cm程度に帯状に赤色顔料の付着するものが多い。12はSKH12であり、中心部が残る。焼成は軟質であり、色調は暗灰色を呈する。5は鬼瓦の右頸から右頸部分である。焼成は堅緻であり、色調は暗灰色である。西面回廊の調査でも出土しており、回廊の四隅に使用されたものと思われる。7は隅切瓦であり、生乾きの段階で成形されている。

S D70出土瓦 S D70は寺域の南限を画す大溝で、軒丸瓦3個体、2型式2種、軒平瓦9個体、4型式5種を出土した。また、S D70より北5mの位置で瓦の堆積層を確認し、SKM02AとSKH01Cを出土した。

4はSKM02Aである。瓦当面はほぼ完形で残っており、補強粘土は内外面に多量に施す。胎土は砂粒を少量含み、焼成は堅緻、色調は灰色を呈する。9はSKH05Aであり、右半部が残る。焼成は軟質であり、色調は淡褐色を呈する。右側面を故意に打ち欠いている。10はSKH13であり、中心部を残す。焼成は軟質であり、内面は赤褐色、外面は暗灰色を呈している。8は新種の軒平瓦であり、SKH25とする。文様は飛雲文であり、文様構成・製作技術はSKH07と似ており、凸面には縄目の叩きを施す。焼成は堅緻であり、砂粒を多く含み、色調は灰色を呈する。14は熨斗瓦である。平瓦製作後に生乾きの段階で半載している。凹面には粘土板合せ目線が確認でき、凸面は格子状の叩きを施す。



第8図 出土瓦実測図 (1 : 4)



第9図 出土瓦実測図 (1:4)

丸瓦・平瓦 昭和58年度からの発掘調査では丸瓦・平瓦が最も多く出土している。その丸瓦・平瓦の数値整理が今後の課題として、注目について後述する。

國分寺造営に際して各地で大量の瓦が生産されたことは言うまでもないが、主要堂塔以外の施物は据立柱施物で、寺域は溝や掘立柱溝で画す例も多く、瓦の必要量に格差があったことは否めない。讚岐國分寺は主要堂塔以外の建物、僧房や鐘楼・築地など瓦葺き建物であり、大量の瓦を必要とした国分寺の一つであったことが分かる。その平瓦は1枚作りを採用している国分寺が多い中で、軒平瓦を含めて創建時は桶巻き作りが主流を占めている。全長は約36cm前後と各地の国分寺（下野、紀伊）で使われる1枚作り平瓦の大きさと差はないようと思われる。しかし、丸瓦は筒部長30cmを越える例が各地（下野、紀伊、三河）で多いが、讃岐國分寺は筒部長約27.5cmのものが主流を占めており、この長さは平安時代中期まで踏襲されるようである。

平成2年度には西端築地を実物大で復原した。屋根には発掘調査で出土した瓦を複製して葺いており、筒部全長の1/2の長さを平瓦の葺き足とした。つまり、葺き足を平瓦全長の1/2よりも短くした。その理由は、葺き足を長くすると、丸瓦玉縁部後端が平瓦と平瓦を重ねた谷部分に落ち込み、丸瓦がずれ落ちる可能性が強くなるからである。その結果、西端築地(全長29.6m)に使用した瓦は、丸瓦1000個、平瓦2200枚となった。丸瓦筒部長30cm(紀伊、三河)を使用すると丸瓦1000個、平瓦2000枚と平瓦が200枚少なくなることがわかる。

葺き足については、平瓦凹面に残る風化の痕跡や丸瓦・平瓦の数量処理によって決定しなければならないが、今回の葺足設定方法も今後数量処理を行うに際しての検討事項としたい。

第2表 年度・地点別軒瓦出土点数一覧

第5章 まとめ

平成3年度の発掘調査では、寺域北東地区で特に顯著な遺構は存在しなかつたが、塩跡南東地区で東面・南面回廊、指定寺域南端地区で南限大溝を検出した。

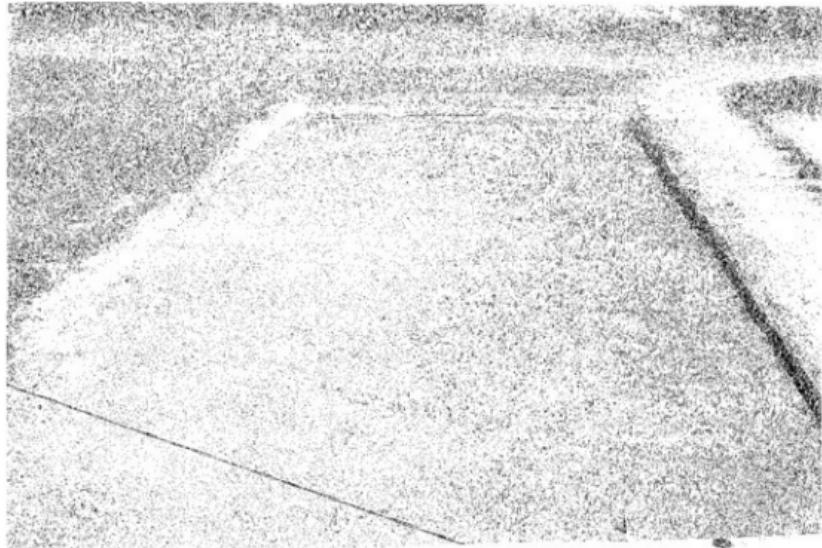
讃岐国分寺の中心伽藍は西4分の1のところに位置しており、寺域東側の広大な敷地には僧侶が共同生活し宗教活動を行うための補助空間として大衆院などに関連した雜舎の存在が考えられ、寺域北東地区ではそうした建物跡の検出が期待された。残念ながら今回の調査区では、そうした古代の建物が存在しないことが判明した。ただし、この地区は遺構の残りにくい使われ方をする、例えば薬院や花苑のようなものがあった可能性も考えられる。今回検出した堀立柱群（SA36）はそうしたものに関連した閉塞施設であったのであろう。

塩跡南東地区では幅6.4mの回廊基壇を確認した。東面回廊は昭和61年度に確認した西面回廊を伽藍中軸線に対して東に折り返した位置にある。わずかに基壇土が残っているが、南に向けて緩やかに削平を受けており、礎石抜取穴などは残っておらず、柱間寸法は一切不明である。南面回廊は基壇上も削平をうけており、東面回廊より遺構の残存状況は良いが、両側の雨落ち溝から現仁王門基壇に取り付くことがわかり、讃岐国分寺の伽藍配置が大官大寺式になることが判明した（第5図）。雨落ち溝からは奈良時代の軒瓦も出土するが、平安時代中期の軒丸瓦SKM09・15が最も多く出土している。この型式の軒丸瓦は昭和52年度に今回の調査区の西側で行われた調査や昭和55年度に行われた推定南西隅回廊跡地区でも多く出土しているが、いずれも対応する軒平瓦が出土していない。軒丸瓦は軒平瓦よりも欠損しやすいので、こうした現象が生じたのであろう。つまり、平安時代中期に回廊を大幅に修理したことが分かる。

指定寺域南端地区では南限大溝を確認した。昭和58年度と昭和61年度の発掘調査で寺域の東・北・西限を既に確認していたが、南限の調査は今回が初めてである。南端築地は南面回廊と同様に削平を受けていたが、大溝と瓦の堆積層からその位置を確定でき、出土土器から11世紀後半には廃絶していたことが分かる。したがって、讃岐国分寺の寺域は東西220m、南北240mの大きさとなる。

以上のように、これまでの調査や境内に残る礎石から主要堂塔の伽藍配置や寺域がほぼ解明された。そのなかには中央の大寺院と対比できる特徴がある。すなわち①南面回廊と南端築地の心々距離は19mで、この延長線上にある中門と南大門とはきわめて近接することになる。②他の国分寺の金堂が中央間3間を等しくする例が多い中で、唐招提寺と同じく柱間寸法が中央間から脇間に漸減している。③僧房が3間1房とした礎石立建物であり、間取りは東大寺戒壇院北室に似ている。④講堂の東側の建物は確認していないが、3面僧房に近い形態を探る。⑤1尺の大きさは0.296mと天平尺を基準とする。さらに、瓦の問題を含めて幾つか考えられるが、地方寺院としては画期的な施設を整備していたことが分かる。

图 版



(1) 寺域北東地区北半部（西から）



(2) 寺域北東地区北半部（東から）



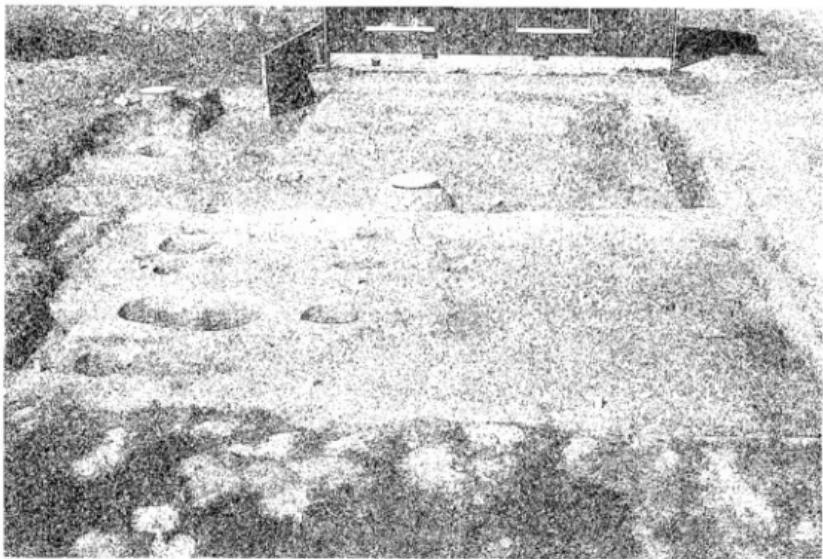
(3) 寺域北東地区南半部（北西から）



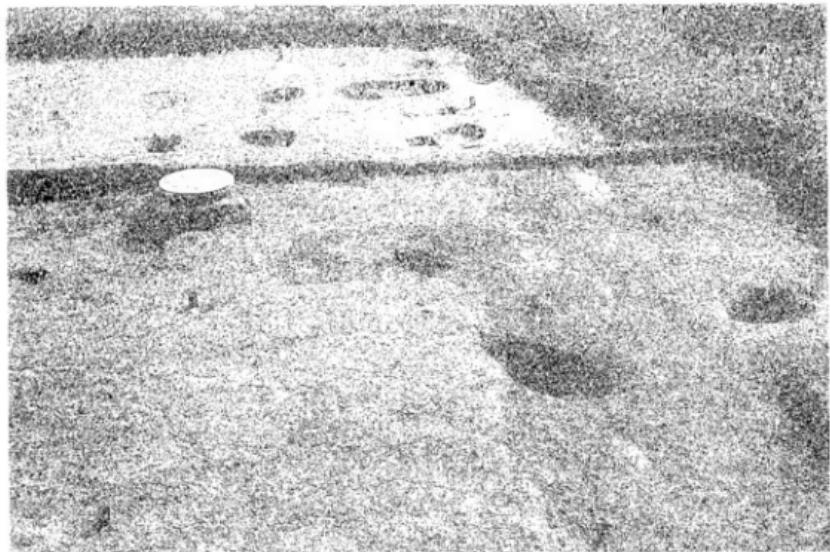
(4) 寺域北東地区南半部（北東から）



(5) SA 36 (東から)



(6) 塔跡南東地区 (南から)



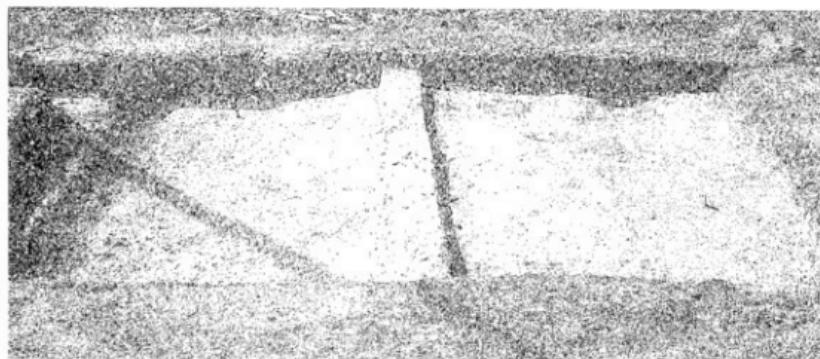
(7) 塔跡南東地区（北から）



(8) 塔跡南東地区（東から）



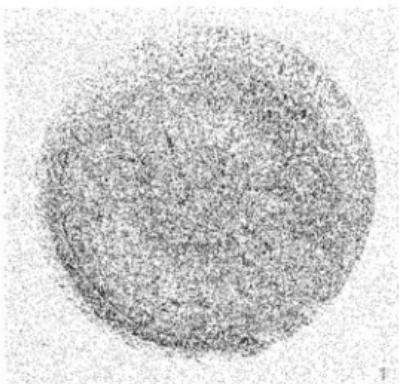
(9) S D61 (西から)



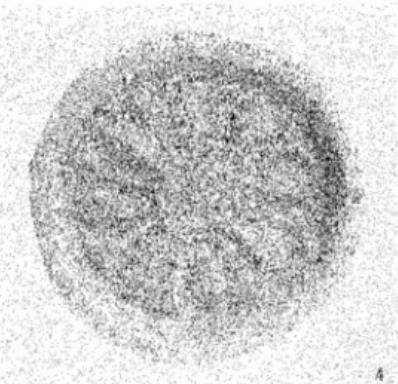
(10) 指定寺域南端地区 (東から)



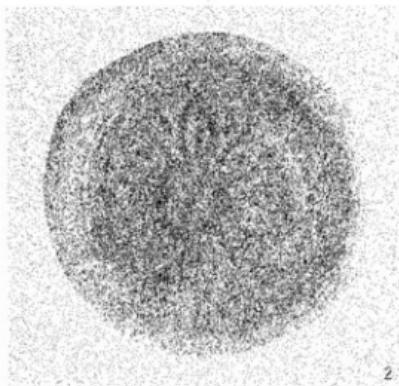
(11) 指定寺域南端地区 (西から)



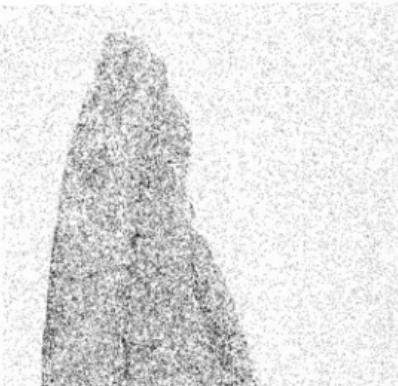
1



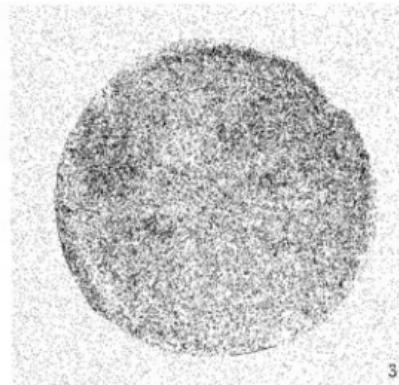
4



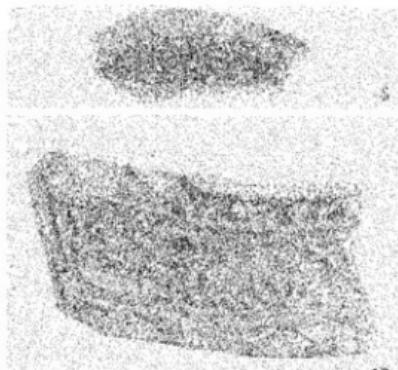
2



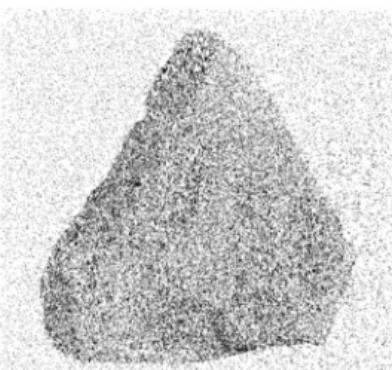
5



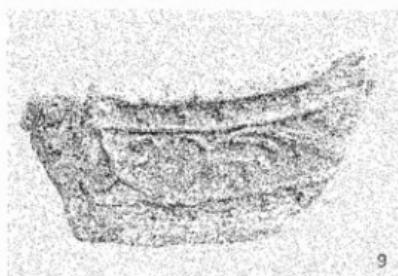
3



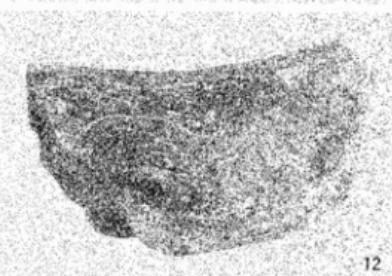
13



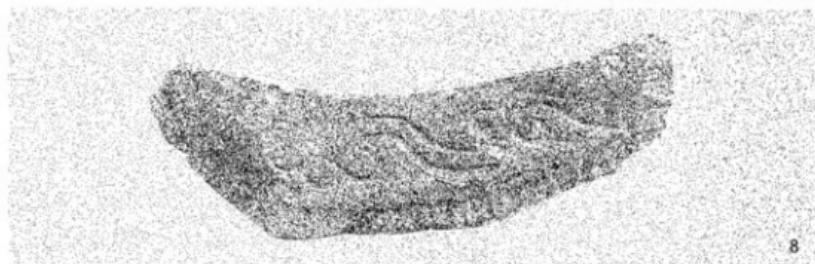
7



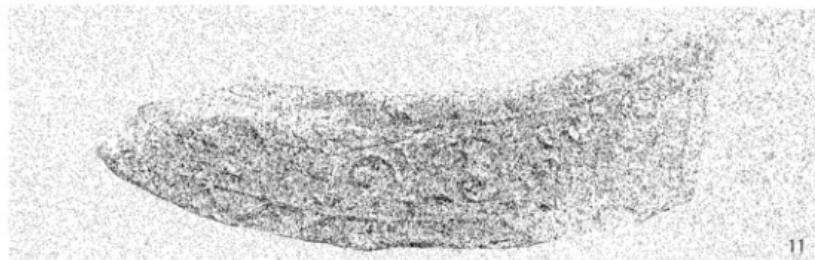
9



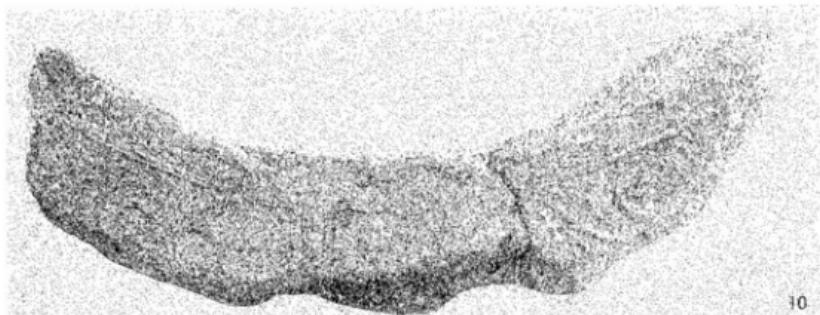
12



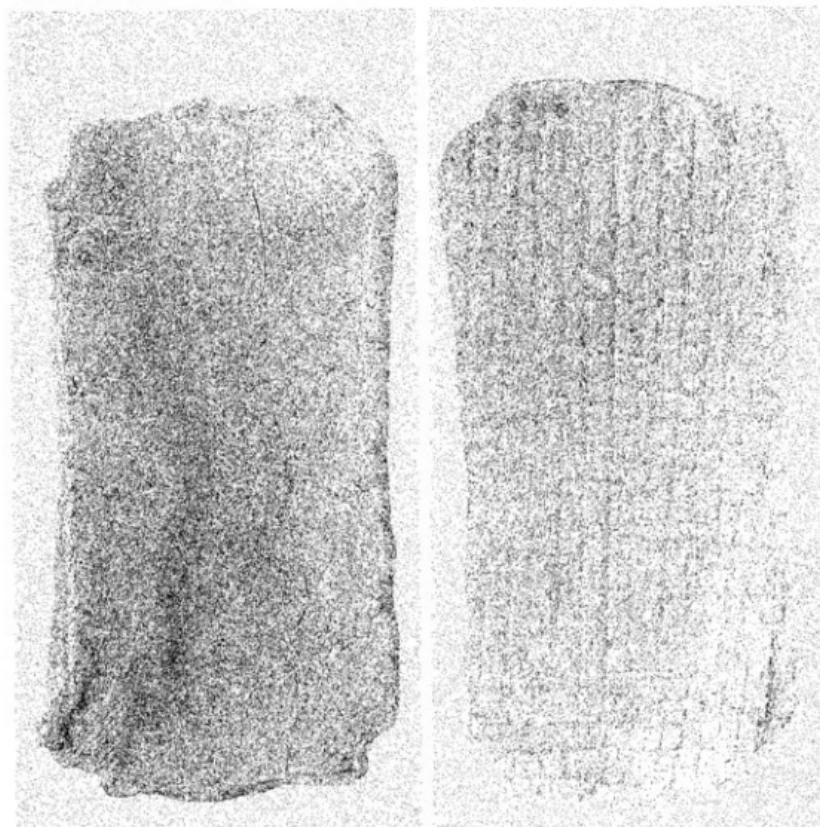
8



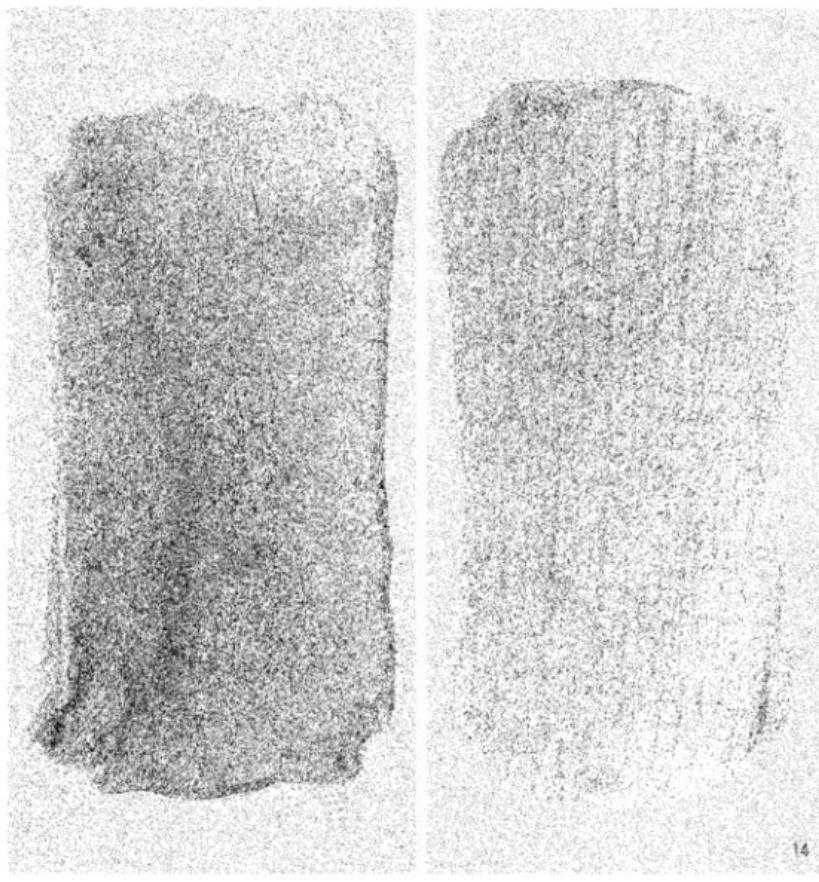
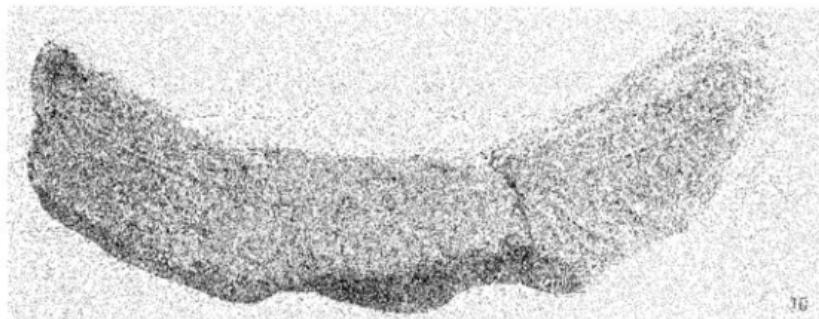
11



10



14



讃岐国分寺跡発掘調査位置図

S = 1 : 1500



特別史跡 讀岐国分寺跡

平成3年度発掘調査概報

1992. 3. 31

編集 発行 国分寺町教育委員会

印刷 (有)エー・ワイ・エー

特別史跡讃岐国分寺跡 保存整備事業報告書

1996

国分寺跡保存事業会



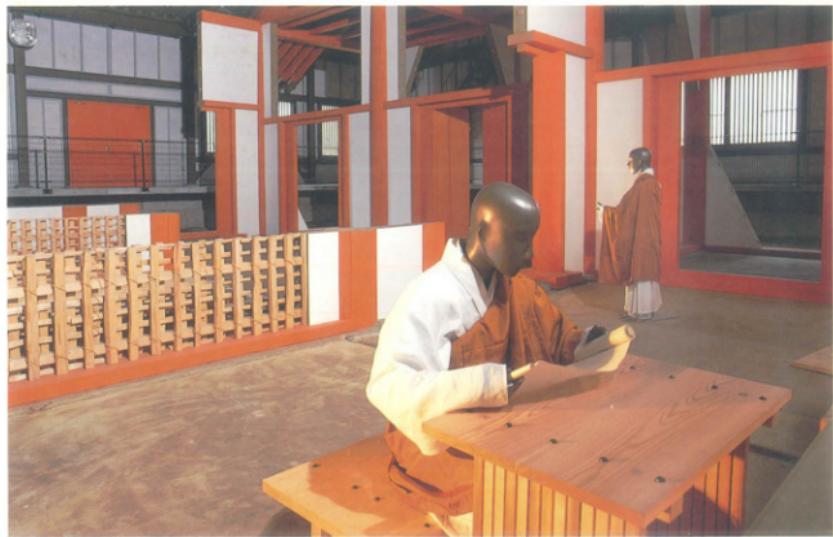
讃岐国分寺跡全景（北から）
(平成5年5月撮影)



東面築地附



僧房跡覆屋



僧房建物



伽藍配置模型（南から）





分寺跡資料館

